

---

# 雨

小林虚数

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨

### 【Nコード】

N7073Y

### 【作者名】

小林虚数

### 【あらすじ】

演劇部員の京子が、寺島という心を病んだ美少年に告白されたらしい。

雨滴が部室の窓ガラスに痛そうにぶつかり続けて、鬱蒼としていた時のことでした。

ジャージから制服に着替え終わった私は仲の良い部員の京子と、その窓のサッシに腰掛けていました。

ちょうど私たちは、劇の小道具を全て片付け終える仕事を、他の部員たちが後にした部室で黙々と終えたところで、私が京子にお金を渡して買いに行ってもらった二人分のコーヒー牛乳を吸いながら、昔のつきあいの頃の喋り方となんら変わらない雰囲気、厭だねえ、を会話の合間に挟んでは、ニヒリステイックに笑いあっていました。部室は電気をつけないで薄暗くしてありました。曇天から漏れる程よい光が、私たちの距離や関係を円滑にしてくれるような気がしたからです。

「寒いねえ」

「風が強いわね。窓ががたがた言ってる」

「いやあねえ、傘を持つ手が凍っちゃう」

京子は、サッシの埃を指でつまみながら言いました。

ある日突然、言葉を喋ることを覚えた猫であればいいとさえ思います。彼女という人間は。

今朝、彼女は同じクラスの寺島君に告白されたそうなのです。

寺島君は精神を病んでいる人です。そして日本人離れた薄くて整った顔立ちをしています。

なので、クラスの女子は露骨に寺島君に親切にしている、京子も寺島君をそれなりに可愛がっていたようでした。

「しかしねえ、寺島の一件、どうしようかねえ」

「付き合っちゃえば？」

「そりゃ無理だわ。アイツ、あたしに告白するために内藤のこと振

ったと言っから」

「内藤って、特進クラスのすごい美人の子じゃん。告白してたんだ、知らなかった」

「でも、内藤も精神病んでるのよ」

「それは聞いた。しかし危険ね、病んでる子同士がくっつくっていうのは。少なからず寺島君は内藤さんに気があったのかしら」

「でしょうねえ。だからあたし寺島嫌い、嫌いというか、嫌いじゃないけど、近づきたくない。あたしと寺島が仮にくっつくとして、内藤はメンヘラ、なのよ。面倒なことになるじゃない」

京子は欧米人のような口調でまくし立てるようにしゃべりました。そういえば彼女は一時期海外映画に傾倒していた時期がありましたっけ。その影響でしょうか。

「あの時告白されたのを、内藤に見られてないかとひやひやしてんのよね。あいついい子らしいんだけど、だから面倒。寺島に一晩で50通メール送ったことがあったそうね。死にたい助けて、そういうメールね。寺島は寺島で律義というか、自分を犠牲にしても内藤を救いたいというか、ぶっちゃけると内藤にそれなりに好意もあった、そこでこれは内藤を自分が独占できるチャンスというか、しかし彼によつてそれは内藤の苦しみを理解できるのは自分しかないという文句に書き換えられる訳だけれど、そういう訳で彼女に電話をして夜が明けるまで励ましました、と」

「がんばれ内藤死ぬなー」

「それむしろ死んで欲しい感じよね」

私たちはお腹を抱えて笑いました。

不謹慎という言葉添えたら、一層息が苦しくなりそうでした。

「如何にどうでもいいというか、あなたたちの営みはもはや現実で行うそれではないということよね。つまり寺島はそれが許されるところに帰化すべきであつて、むしろあたしの領域に立ち入ることはかえって彼を不幸にすることだと思ふの。別に彼のことを拒絶している訳じゃあないの。恋愛とは運命に過ぎない訳で、その運命はあ

たしが操作することも可能だし、詭弁じみているけれどあたしの操作は見えざる手によってなされた、そして内藤の抱く好意も同様に確からしい、そういうことに結論が下されたとしても、誰も文句は言えないのよね。という訳なので、あたしは寺島くんの新しい恋の革命とやらを、見届けることにします」

外で雷鳴が起りました。

そうして、運命はまたひとつの軌跡をこの世界に残したのではないかなと思います。

京子は、帰ろうか、と呟き、私も京子に、うん、と声を弾ませ、私は京子と濃厚な口づけを交わしました。舌を貪欲に絡ませ、お互いを求めあいました。

そうです、運命というのは、結局のところこういうものだから素敵。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7073y/>

---

雨

2011年11月21日10時54分発行